

事案名	佐世保市の事案（長崎県４２－１）
フォローアップ調査資料	<ul style="list-style-type: none"> ・「日本海軍ニ於ケル化兵戦関係概況」〔１〕 ・『相模海軍工廠』１９８４年〔２〕 ・「毒瓦斯及其ノ充填兵器処理ニ関スル件」１９４５年９月〔３〕 ・Intelligence Report on Japanese Chemical Warfare, Volume〔４〕 ・Reports on Scientific Intelligence Survey in Japan. September & October 1945. Vol. IV Chemical Warfare I-NOV-45〔５〕 ・「佐世保海軍軍需部引渡目録」１／２〔６〕
追加資料	<ul style="list-style-type: none"> ・「佐世保海軍軍需部引渡目録」１／２〔Ａ１〕 ・「第２１海軍航空廠引渡目録」１／２〔Ａ２〕 ・「第２１海軍航空廠引渡目録」２／２〔Ａ３〕 ・「旧軍毒ガス弾（佐世保Ｃ事例）に係る関連情報について」平成１７年１月４日〔Ａ４〕 ・『佐世保市史 軍港史編 下巻』〔Ａ５〕 ・『日本海軍航空史（２）軍備編』〔Ａ６〕 ・『平成１６年度国内における旧軍毒ガス弾等に係る情報収集及び取りまとめ業務報告書』〔Ａ７〕 ・「自衛隊施設の使用実態等調査書（業務資料）」〔Ａ８〕 ・長崎県平和委員会ホームページ〔Ａ９〕 ・『佐世保港の戦後史』〔Ａ１０〕 ・『平成１６年度Ｂ／Ｃ事案における第２次地下水調査業務 報告書』〔Ａ１１〕
平成１５年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和２０年９月９日現在の佐世保における保有量は、６０ｋｇイペリット爆弾約５，０００発であったと記載されている〔１〕〔２〕。 ・昭和２０年９月９日現在、佐世保にはイペリット爆弾約５，０００発が残存していたと記載されている〔３〕。 ・第２１海軍航空廠（佐世保）に６０ｋｇイペリット爆弾５，０００発が残存していたと記載されている（日付は不明）〔４〕〔５〕。 ・昭和２０年９月１４日現在、佐世保海軍軍需部には催涙筐２００個と手投涙弾２８，８２８個が存在していたと記載されている〔６〕。

<p>新たな情報</p>	<p>その他情報</p> <p>(1) 毒ガスに係る情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毒ガス弾の保有情報はないが、昭和 2 0 年 3 月 3 1 日現在の建築物目録に、干盡に「化学兵器装填及修理場」、「化学兵器装填及渡廊下」が存在していたとの記載がある〔 A 1 〕。 ・第 2 1 海軍航空廠の施設目録の中に、牛ノ浦地区に「特薬庫覆土式」との記載がある〔 A 2 〕。 ・毒ガス弾の保有情報はないが、昭和 2 0 年 8 月 3 1 日現在の航空兵器現状表（牛ノ浦補給工場）の中に、「特薬庫」と「特薬作業場」との記載があり、その位置が示されている〔 A 3 〕。 ・「特薬庫」が存在したとされる地域は、現在米軍の弾薬庫や施設がある地区で立入禁止地区となっている〔 A 4 〕。 <p>(2) 第 2 1 海軍航空廠に係る情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 2 1 海軍航空廠（佐世保）は、日宇、崎辺、広畑（現金山弾庫方面）、牛ノ浦地区に存在していた〔 A 5 〕。また、同航空廠の補給工場は、崎辺補給工場、広畑補給工場、日宇補給工場が存在していた〔 A 6 〕。弾薬庫は、広畑、日宇、尼潟に存在したが、大部が終戦時廃却され、一部は、現在海上自衛隊が使用している〔 A 7 〕。各地の戦後の変遷と現況を示すと下記の通りである。 <p>【日宇地区】：戦後大蔵省から払い下げられ、民間工場として利用された。現在は、民家や学校等が存在している〔 A 5 〕〔 A 7 〕。</p> <p>【崎辺地区】：戦後米軍が使用したが、現在は、海上自衛隊佐世保教育隊となっている〔 A 5 〕〔 A 7 〕。海上自衛隊佐世保教育隊は、旧海軍佐世保航空隊及び旧第 2 1 海軍航空廠崎辺工場の跡地との記載がある〔 A 8 〕。</p> <p>【広畑地区】：広畑地区とは、現在の金山及び現在の海上自衛隊の弾薬庫周辺との情報がある〔 A 7 〕。現金山弾薬庫は、旧海軍尼潟火薬庫跡地であり、同火薬庫は、戦後海上保安庁・民間に払い下げられ、その後昭和 2 9 年にその民有地を購入し、開設された〔 A 9 〕。</p> <p>【牛ノ浦地区（安久ノ浦・牛ノ浦）】：弾薬・火薬等の処理を行う米軍針尾島弾薬集積所は、旧海軍が工場・補給倉庫施設として使用していた〔 A 9 〕。また、海上自衛隊針尾弾薬庫は、旧海軍補給倉庫地区跡で戦後は開拓農地として払い下げられたが、昭和 2 6 年 8 月の朝鮮戦争に際して米軍が接收し、昭和 4 5 年から自衛隊と共同使用しているとの情報がある〔 A 9 〕。</p>
--------------	---

	<p>(3) 佐世保海軍軍需部に係る情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐世保海軍軍需部は、平瀬、干盡（干尽）、前畑、崎辺、日宇、赤碕、川ノ谷、庵崎、横瀬、堇ヶ丘、早岐に存在した〔 A 5 〕。各地の戦後の変遷と現況を示すと下記の通りである。 【日宇地区】：戦後、建物の大部分は撤去された。現在は、民家や学校等が存在している〔 A 5 〕〔 A 7 〕。 【平瀬地区】：戦後から現在に至るまで米軍が使用している〔 A 5 〕。 【干盡（干尽）】：戦後、大蔵省から払い下げられた。現在は、民間企業が存在している〔 A 5 〕。 【前畑】：戦後米軍が接收し、現在は米軍前畑弾薬庫が存在する〔 A 5 〕。 【赤碕、川ノ谷、庵崎、横瀬】：戦後から現在に至るまで米軍が使用している〔 A 5 〕。 【堇ヶ丘、早岐】：戦後払い下げられ、会社工場・学校となった〔 A 5 〕。 <p>(4) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦後における通常弾等の処理については、昭和 2 0 年 8 月 2 6 日佐世保鎮守府副官より、米内海軍大臣からの指令として「兵器・軍需品は取りまとめ、目録を作成して菅下軍需部が海軍工廠補給部に還納する」、「艦艇搭載の弾薬・魚雷はすみやかに陸上に格納する」、「鎮守府・警備府指令官は、兵器庫・需品庫施設に引渡し委員を置き、連合軍側武器接收委員との折衝にあたる」等の弾薬処理に係る指示が出された。そして佐世保では、兵器の海没処理が行われている〔 A 5 〕。なお、兵器・弾薬に関しては、引渡し後に解毀処分され、小火器の一部は警察用に転用されたとの記載がある〔 A 5 〕。 ・旧海軍の弾薬の処理には港湾運送業者が係っており、昭和 2 0 年暮から同 2 1 年はじめにかけて大事故は 3 件（ 2 3 人死亡、 1 2 人重傷）発生している〔 A 1 0 〕。 ・佐世保市では、平成 3 年から 1 6 年までに 1 3 件の不発弾処理が行われているが、毒ガス弾の発見事案は存在していない〔 A 7 〕。 ・環境省が実施した地下水調査の結果、毒ガス関連成分は検出されなかった〔 A 1 1 〕。
--	--